

実践ノート

看図アプローチを利用した LGBTQ に関する 小学生向け教材についての予備的検討 —教材作成プロセスと学習会での検討・実践—

三原菜奈海¹⁾・森 孝文²⁾・溝上広樹³⁾

MIHARA Nanami MORI Takafumi MIZOKAMI Hiroki

キーワード：LGBTQ・看図アプローチ・小学生・総合的な探究の時間

I. 背景・目的

本稿第1筆者三原は熊本県立第一高等学校に在籍する生徒である。三原は高等学校2学年の「総合的な探究の時間」に、小学校4・5年生を対象としたLGBTQ学習のための教材を作成することにした。ジェンダーによる好みという暗黙のルールに児童が縛られ、周囲を評価したり、自身の行動を制限したりしている現状を知り、その解決に役立つ教材づくりを行いたいと考えた。そして、「好きなものを好きと言える学級づくり」を目指した授業づくりについて研究することにした。

小学生を対象にするため、「わかりやすい授業」とは一体何なのかを考えた。「説明するだけ」では伝わりにくいが、イラストや図を提示するだけでも本当の理解には繋がらず、目的を達成することは困難だと感じていた。そこで、誰でも参加が可能で、かつ主体的・対話的で深い学びを促すための教育手法として紹介されている看図アプローチを採用することにした（鹿内 2015, 溝上 2022）。看図アプローチの「見る」（注意深く観察する）ことに重点を置いた上で、「考える」ことを促すこの方法ならば、児童の「わかりやすさ」を深く追求でき、目的を達成できると考えた。

本研究では、最終的には看図アプローチ教材を作成し、小学4・5年生を対象とした授業を行うことを目指す。ジェンダーや性差については、当事者や関係者が身近にいない限り想像しにくい事柄である。一方で、これまでの生活を通して知らず知らずのうちに身に付けてきた先入観や偏見については、日常の場面を振り返ることで気づくことができると考えている。看図アプローチを駆使することで、この課題に向き合うハードルを下げ、「見る」ことを通して深く「考える」ことで、児童のこれからの行動に繋がる教材にしたい。

本稿では、予備的検討として、開発過程を紹介すると共に、教員有志によるアクティブラーニングの学習会（アクティブラーニング型授業研究会くまもと、以降ALくまもと）において、検討・実践した過程を報告する。

II. ビジュアルテキストの開発過程

II-1 候補と絞り込み

今回の研究では、看図アプローチで使用するビジュアルテキストについては、手描きにより作成することにした。その際、鹿内（2014）によって報告されている「曖昧・欠落」等の特徴が備わ

1) 熊本県立第一高等学校 (生徒)
2) 熊本県立第一高等学校 (教員)
3) 崇城大学

るよう意識して描くことを心掛けた。つまり、イラストにノイズを入れて情報を多くしたり、直接誘導をしないようにしたりした。

ビジュアルテキストの内容については、日常的な場面においてジェンダーを意識する状況を考えて。その結果として、水泳の授業・パレード・表彰台・集合写真・銭湯・文化祭準備の6つの場面を候補に挙げた。

最終的には、「身近な場面」で「多くの情報を描き込める」という2つの観点から、銭湯と文化祭準備の2つの場面を採用することにした。なお、他の場面については、次の理由により今回は採用しなかった。

- 水泳の授業：ラッシュガードを着ているのは女の子が多いイメージだが、男の子も着ているイラストを想定した。しかし、水泳帽をかぶることで、髪型では男女を判断しにくく、単調なイラストとなる可能性がある。
- パレード：幼稚園児が街中でパレードをしている様子を想定した。ここでは、男女を髪型やポーズで区別する予定であった。しかし、このような場面はよくある風景でないため、身近に感じにくくなる可能性があると考えた。
- 表彰台：服装、髪型、体型で男女区別できるイラストを想定した。しかし、競技の中ですでに男女が別れているため、状況設定が不自然となる可能性がある。
- 集合写真：服装、髪型、ポーズが多様となるイラストを想定した。しかし、整列をした状態では、表現に限界があると考えた。

II-2 文化祭準備のイラストの制作過程

演劇の準備をしている中学生の様子を描いた。役割分担をしているが、男女が集まっているところも見受けられるように描いた。また、役割決めにより性別が影響しているのかを考えられるようにし、座り方や服装から男女の区別ができるようにした。図1はALくまもとの授業検討会に持参した修正前のイラストである。



図1 検討会前の文化祭準備のイラスト

II-3 銭湯のイラストの制作過程

髪型、服装を意識し、女湯にだけ髪を結ぶように呼びかけるポスターを描いた。また、女湯に年齢の低い男の子を描くなど性別との関わりを考えられるイラストになるようにした。図2は最初に描いたイラストである。



図2 検討会前の銭湯のイラスト

その後、看図アプローチのビジュアルテキストとしてより機能するイラストにすることを意識し、多様な解釈が可能となるよう修正を加えた。この際、ノイズの増加による曖昧性の向上や人物の視線や表情を消す等の欠落を意識し作成した(図6, p.29 参照)。

Ⅲ. 勉強会での検討と実践

Ⅲ-1 授業デザイン会での内容検討

内容のブラッシュアップを目的として、第27回アクティブラーニング型授業研究会くまもの「AL くまもと探究型授業づくり実践講座」に参加した。勉強会は、2024年11月23日に崇城大学池田キャンパス SoLA ホールで、次のスケジュールで実施された。

【講座スケジュール】

■ 第一部 授業デザイン会 (10:00 ~ 11:30)

- (1) 趣旨説明, グループでチェックイン
- (2) 前回の勉強会のリフレクション, アクションについて話題提供
- (3) グループ内でアクションや課題感共有
- (4) 授業者等の紹介
- (5) 授業デザイン会

■ 第二部 模擬授業体験 (13:00 ~ 15:25)

- (1) 説明
- (2) 模擬授業 1 本目
- (3) 模擬授業 2 本目
- (4) 模擬授業 3 本目
- (5) 模擬授業 4 本目

■ 第三部 振り返り会 (15:40 ~ 17:00)

- (1) 振り返り会 1 回目
- (2) 振り返り会 2 回目
- (3) 振り返り会 3 回目
- (4) チェックアウト
- (5) 連絡, 終了

午前中(第一部)は、まず4つの授業がそれぞれの授業者から提案され、参加者は希望する授業デザイン会に参加した。1授業当たり10名程度で授業デザインを行った。授業者には、サポーターとファシリテーショングラフィッカーが配置され、ワークショップ形式の授業デザイン会が行われた。ここでは、第1筆者の三原と第2筆者の森が授業者として、また第3筆者の溝上がサポーター兼ファシリテーショングラフィッカーとしてそれぞれ登壇した。授業デザイン会では、まず授業のねらいや授業展開を次の通り森が共有した。

【本授業の概要】

1. 主題名

性と自分らしさ

2. ねらい

人には、体の性以外にも、いろいろな性の見方、考え方があることに気づき、知らず知らずのうちに全てを体の性に合わせようとしてしまっていることに気づく。

3. 当初の学習指導案(表1)

表1 当初の学習指導案

	学習活動	指導上の留意点
導 入	1.文化祭のイラストを見て気づくことができるだけ多く出す。各班が発表する。 2.男女兼用の制服の写真をみる。	○4~5人の班を作らせる。 ○イラストの横に発表内容を書き出させる。 ○男女兼用の制服が増えていること、生徒側からの意見によるものであると伝える。なぜかを問い掛ける。

<p>展開</p>	<p>3.なぜ、新しい制服を作って欲しいという意見が挙がるのかを考える。 4.パイロットと客室乗務員のイラストを見てどちらにインタビューをしたいかタブレットで投票する。次に、男女別のトイレのイラストを見て、どちらを使用するかタブレットで投票する。 5.4.の活動の数の違いに注目して、なぜ違うのかを考え発表する。</p>	<p>○他の人に相談することなく自分の意見で選択するように指導する。 ○投票数を比較するように促す。 ○体の性と興味関心は異なることに気づくように問いかける。</p>
<p>まとめ</p>	<p>6.銭湯のイラストを見て、班で気づいたことを発表する。「入浴マナー」(滋賀県生活衛生営業指導センター)についての資料を見た後、もう一度銭湯のイラストを確認する。 7.なぜ女性側にだけ髪を湯船につけない注意書きがされているのか、8歳からなぜ混浴はダメなのか考える。 8.性には体の性だけでなく、心の性があることに気づく。</p>	<p>○銭湯のイラストを示して、ある程度意見が出たところで、「入浴マナー」を示す。 ○様子を見て湯船に髪をつけないことや8歳から混浴禁止というルールに着目させる。 ○知らず知らずに体の性と心の性は同じと思い込んでいることに触れまとめる。</p>

【授業デザイン会の様子】

授業検討会では、参加者とのディスカッションを通して、さらなる工夫が必要であることが明らかになった。導入部分からみていく。なお、参加者の発言は、ファシリテーショングラフィックとして可視化しその場で共有した(図3)。

検討会前、導入は次のように計画していた。

文化祭準備のイラスト(図1)から気づいたことを挙げてもらい、制服から役割分担に男女が関係していることに気づかせる。その後、制服の男女兼用を紹介する。そして、最近生徒側から兼用の服を導入して欲しいという意見が挙がっていることを伝え、その理由を問う。

この導入案に対して、「イラストの目につく名詞を挙げさせ、挙げた名詞を使用して文章を作るといった細部に注目する段階を加えることで、気づきを文章化しやすい」との意見があった。また、「男女兼用の制服より、男女による役割分担に着目してそれを問いにした方が良いのでは」と

の意見もあった。イラスト中の黒板の文字を残すべきかどうかも話題になったが、今回はそのまま使用することにした。

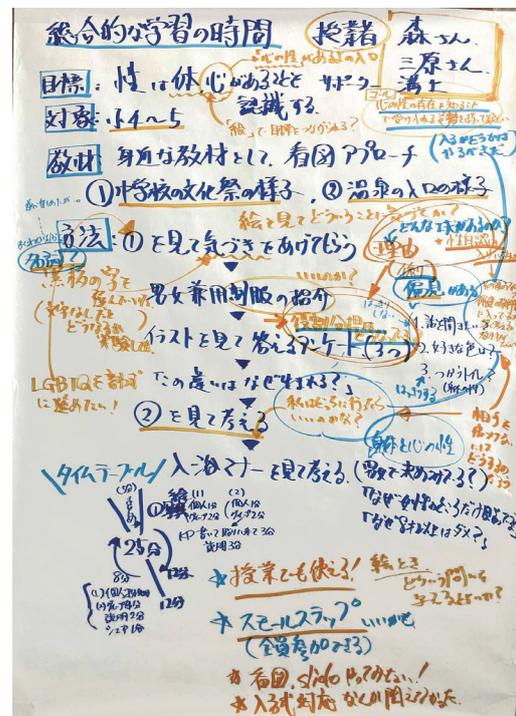


図3 授業検討会のファシリテーショングラフィック (一部を参考資料として挙げる)

III-2 模擬授業の様子

午後（第二部）の模擬授業1本目として25分の授業を行った。この際、森が進行し、三原が解説をした。授業デザイン会に加わった6名は見学者として、他の34名（高校教員、大学教員等）は児童役として参加した。当日の授業は次のステップで実施した。

【ステップ1】文化祭準備のイラストを利用したワーク

- a) ビジュアルテキスト（図4）を印刷したA5紙を学習者に配付する
- b) 同じビジュアルテキスト（図4）をプロジェクターでも投影する
- c) 「イラストをよく見て見つけた名詞をできるだけたくさん書き出そう」と指示する
- d) 「先ほどの活動を踏まえて、イラストを見て気づいたことをA4紙に記入しよう」と指示する（A4紙配付）

a～bの準備を整えたところで、cの指示をした。c～dは、看図アプローチの典型的な質問の形式に準じる形で実施した（鹿内2015、溝上2025）。その後、4名グループ内で共有する活動を行った。学習者は、ビジュアルテキストに直接描かれているものを記入した。ここでは主に次のような名詞が挙げられていた。「生徒」「時計」「のり」「はさみ」「黒板」「男の子」「女の子」「絵具」「本」「時間割」「ゴミ箱」。特に「生徒」の回答が多くみられた。これ以外にも、「制服」といった回答もあった。

次に、dの指示をし、各自が水性マーカーでA4紙に気づきを記入していった。この際、1枚の紙には、1つの気づきを記入するように指示した。記入後は、グループ内で気づきを発表し合い、共有した。さらに、発表がひと通り終わった班から、それぞれ記入した紙を前方に掲示してもらった（図5）。

その後、似た気づきを近くに貼り直し緩やかに分類をした上で、授業者から紹介をした。ここでは、主に次のような気づきが出されていた。

- 性別で役割分担をしている
- 道具は男子、服は女子で役割分担をしている
- 台本係は性別で役割分担されていない
- 座り方が正座、あぐら、片膝立ちがある
- どのような表情をしているかわからない
- いろんな道具が散らかっている
- 他の人と違う制服を着ている人がひとりいる
- ひらがなが多い
- 教室のレイアウトは、いつもの教室とは異なっている

最も多かった気づきは「性別での役割分担」に関するものであり、男女での分担の違いを疑問視する声も挙がった。



図5 各自の「気づき」の前方への掲示

【ステップ2】ジェンダーの先入観について説明

授業デザイン会を受けて、この部分についてはワークを入れずに、授業者が想定していた展開を口頭で説明するだけに留めた（p.26「3. 当初の学習指導案」展開を参照）。

【ステップ3】 銭湯のイラストを利用したワーク

- e) ビジュアルテキスト（図6）を印刷したA5紙を学習者に配付する
- f) 同じビジュアルテキスト（図6）をプロジェクターでも投影する
- g) 「子どもは、男湯と女湯のどちらに入らしましょう。理由も併せて考えましょう。」と指示する
- h) イラストの意図を説明
- i) まとめとして活動の振り返りをする

e～fの準備を整えたところで、gの指示をした。この際、子どもだけに注目してもらい、「注目した子どもは女湯と男湯のどちらに入ると思いますか？」と伝えた。その後、4名グループ内で共有する活動を行った（図7）。

「男湯に入る」もしくは「女湯に入る」と回答した際の理由として、次のような意見が出された。

【男湯に入ると考えた理由】

- 妊婦さんと一緒にいる子どもは男湯に、お母さんと問答していることから、男湯に行くように促されている

【女湯に入ると考えた理由】

- 妊婦さんと一緒にいる子どもは女湯に、お母さんと一緒にいるし、女湯に近いから
- 髪も長いので女湯に入る
- 女湯の入口にいる車の玩具を持っている子は兄弟で、男湯に入りたけれど、お母さんに連れられて女湯に入ろうとしている



「銭湯」のイラスト修正前（図2再掲）



図6 「銭湯」のイラスト修正後



図7 銭湯のイラストを読み解く学習者の様子

【ステップ4】まとめ

第1筆者でイラスト作成者の三原が、イラストの意図として、図6の矢印の子どもについて次の通り解説をした（図8）。

- 注目している子どもは混浴の年齢制限を超えているため、母親と一緒に銭湯に入ることができない
- 女湯からは二人の子ども（注目している子どもの兄弟）が顔をのぞかせていて、母親が来るのを待っている
- 注目している子どもは兄弟で一人だけ男湯に入らなければならないことに抵抗している

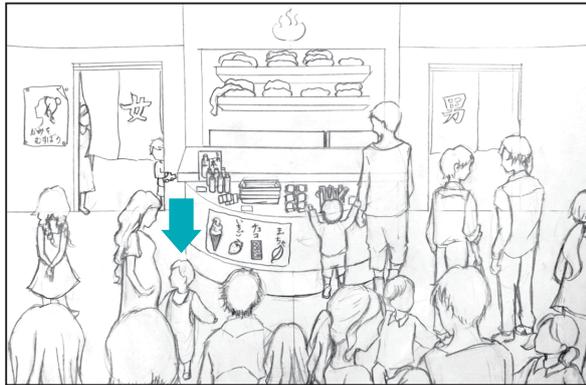


図6（再掲）



図8 イラスト作成の意図を説明する様子

III-3 振り返り会での議論

振り返り会（第三部）では、3回のセッションを設けた。1回目は、授業者及び授業デザイン会に参加したメンバーで実施した。2回目は、授業者及び児童役で参加したメンバーで実施した。3回目は、1回目と同じメンバーで実施した。

この振り返り会で出された意見は、第3筆者の溝上によってグラフィックレコードを行った。この際、授業手法などの表面的な議論となることを防ぎ、より深い気づきに向かうよう、コルトハーヘンの「具体化のための質問」（表2）を利用した。ここでは、実践の文脈を意識しながら、授業者と学習者の立場から表2の通り4つの層にわたって記録をした（コルトハーヘン 邦訳 2010, 渡辺 2019）。ここでは、話し合いの硬直化が起らないようフレームを埋めるのではなく、出された意見を緩やかに分類しながら記入していくために利用した（図9）。

表2 具体化ための質問

文脈はどのようなものでしたか？	授業者	学習者
Want 望んでいたこと	①	⑤
Do したこと	②	⑥
Think 考えていたこと	③	⑦
Feel 感じたこと	④	⑧

Korthagen et al. (2001) をもとに、第3筆者作成（一部改）



図9 振り返り会での記録の様子

振り返り会では、①～⑧に相当する意見として、主に次のような意見が出された。

【授業者】

① 授業者が望んでいたこと

- 性による偏見に気づいてもらいたい。
- (文化祭準備のイラストの) 気づきを分類した後、(銭湯のイラストに繋がる) 問いかけを考えたい。
- LGBTQだけでなく、(イラストの中の工夫について) 様々なところに気づいて欲しい。

② 授業者がしたこと

- 看図アプローチで日常の場面を切り取ることで、偏見に気づかせる。
- 看図アプローチを利用することで、様々な意見がフラットな関係性の中で出されるようにする。
- イラストの曖昧性を高める。

③ 授業者が考えていたこと

- 心は自由なはず。
- 誘導せずに導きたい。

④ 授業者が感じたこと

- イラストから実際に読み取ってもらえて、自信になった。嬉しかった。

【学習者】

⑤ 学習者が望んでいたこと

(該当する主な意見はなし)

⑥ 学習者がしたこと

- 問いが(次々と)出てきた。

⑦ 学習者が考えていたこと

- 子どもとお母さんがやり取りをしているイラストは考えさせられた。
- 名詞を書き出す活動は小学生でもくいつきそう。
- 自分の価値観で判断していいのか迷った(揺さぶられた)。
- イラストを通して、生物的性だけでなく社会的性等について、自分がどう認識しているのかがわかった。

⑧ 学習者が感じたこと

- 高校生が描いたイラストが素晴らしく、強みがあると感じた。AIではつくれないと思った。
- 高校生がつくったという点で驚いた。
- 楽しさから入っていくことで、自主的に学びたいと思えた。

IV. まとめと今後の課題

授業検討会での議論を通して、文化祭準備のイラストでは、当初意識していた制服だけでなく、「座り方」といった視点でイラストを描き加えることができた。このことで私たちが生活している小さなところにも、その人の「らしさ」があり、それを性別だけで決めつけてはいけないと再認識することができた。

また、銭湯のイラストでは、どのような発問を行うのか迷っていたが、25分という時間に合わせた問いを考えることができた。「子どもは男湯と女湯のどちらに入るでしょう？」は、外挿に相当する発問であった。子どもに焦点を絞り、それぞれのストーリーを様々な視点で考えることで、どのような場面で性別を意識しているのかを具体的に捉えやすくなった。それぞれの性別に関する認識を再確認してもらうのと同時に、今後同様の状況になったときに多角的に考えて欲しいという思いも伝わったと感じた。

いずれも完成前のイラストであったが、検討会や模擬授業を通して、発問を含めて改善のヒントを得ることができた。併せて、今後検討すべき課題として次のような点を見出すことができた。

- 文化祭準備のイラストでは、発問は2段階でよいか/イラストの中にある黒板の字は入れるべきか
- 性に関することに、よりスムーズに繋げるためにはどうするとよいか

これらの点を踏まえ、小学生を対象とした授業では、次のような方法での実施を考えた。

文化祭準備のイラストを使用する際は、名詞という言葉使用せずに「何が描いてあるかな。描かれている『もの』をできるだけたくさん挙げてみましょう」と聞き、次に「書き出したものを使って文章で説明してみよう」と発問する。そうすることで、黒板の字を名詞として捉え、解答時に強く黒板の字に引っ張られるのを防ぐことにする。場合によっては、黒板の字を「・・・」等で表現することも併せて検討する。発問については、その後、「どのような係があって、どのような生徒が担当しているかな」と尋ねる3段階で実施する。このステップで、係の種類と担当する生徒の特徴を各班で考え発表してもらい、性別と役割との関わりに繋げていく。さらに、この役割分担の妥当性について発問し、男女で分けるのではなく、やりたい気持ちや得意・不得意で分ける方法があることに気づかせる流れを考えている。

銭湯のイラストでは、模擬授業と同じ発問で「子どもはどっちに入っていくでしょうか」「その理由も考えてください」とする。各班の意見を発表させた後、入浴のルールのイラストを掲示し、銭湯の入口のイラストを確認させる。「なぜ女性側にだけ髪を湯船につけない注意書きがされているのか」「8歳からなぜ混浴はダメなのか」と問うことで、髪が長いのは女性という決めつけや、8歳からの混浴禁止は、心の性の発達と関連していることに気づかせる。

なお、子ども自身が異性混浴をはずかしいと思いはじめた年齢は6歳と7歳が相対的に高い等の報告もあり（植田 2020）、厚生労働大臣官房生活衛生・食品安全審議官（2020）の通知では「おおむね10歳以上の男女を混浴させないこと」とされていたものが「おおむね7歳以上」に変更されている。その後、地方自治他の条例改正が促され、全国的に混浴禁止年齢が引き下げられる傾向がみられている。

本授業を通して、性には体の性だけでなく、心の性があることや、体の性と心の性は無意識に同じと思いつまみ込んでいることに気づかせる。この思いつまみ込みによって、自身が縛られていることに気づき、

この先入観から解放されることで、より良い社会が築けることへの理解へと繋げたい。子どもたちが自信を持って「好きなもの」を主張していいのだという思いや、友達の心を大切にする思いを持って、学校生活を送っていく姿を期待したい。

引用・参考文献

- Korthagen, F. A. J. et al. 2001 『Linking Practice and Theory: The Pedagogy of Realistic Teacher Education』 London, Routledge (F. コルトハーヘン編著, 武田信子監訳, 今泉友里・鈴木悠太・山田恵理子訳 2010 『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリティ・アプローチ』学文社)
- 厚生労働省大臣官房生活衛生・食品安全審議官 2020.12.10 「公衆浴場における衛生等管理要領等の改正について」(生食発 1210 第1号)
- 溝上広樹 2022 「1人1台端末を利用した高校生物における看図アプローチ授業実践」『全国看図アプローチ研究会研究誌』12号 pp.3-9
- 滋賀県生活衛生営業指導センター 「入浴マナー(多言語版)」
<https://www.shigalife.or.jp/pickup/sentou/manner.html>
(2025.5.28 閲覧)
- 鹿内信善(編著) 2014 『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ協同学習の新しいかたち・看図作文レパートリー』ナカニシヤ出版
- 鹿内信善 2015 『改訂増補 協同学習ツールのつくり方いかし方—看図アプローチで育てる学びの力—』ナカニシヤ出版
- 植田誠治 2020 『子どもの発育発達と公衆浴場における混浴年齢に関する研究』厚生労働行政推進調査事業費 補助金 厚生労働科学特別研究事業(19CA2029) 総括・分担研究報告書
- 渡辺貴裕 2019 『授業づくりの考え方 小学校の模擬授業とリフレクションで学ぶ』くろしお出版

謝 辞

本研究に際し、ご理解とご了承をいただきました「アクティブラーニング型授業研究会くまもと」の参加者の皆さまに心より感謝申し上げます。

2025年6月5日 受付

2025年6月9日 受理